

認知言語学からみた日本語教育

京都大学教授 山梨 正明

このコーナーでは、これから研究を目指す海外の日本語の先生方のために、日本語学・日本語教育の研究について情報をおとどけています。今回のテーマは認知言語学です。

1. はじめに

これまでの言葉の研究、たとえば伝統的な規範文法、記述文法、構造言語学、生成文法などに代表される従来の分析では、主に文法的な知識の記述と一般化に力点が置かれ、その背後に存在する言語主体の認知能力や運用能力との関連で文法的な知識の本質を探究していくという視点が欠如している。現在、新しい言語研究の流れとして注目されている認知言語学の研究では、この後者の視点から言葉の本質を探究していくダイナミックなアプローチがとられている。

文法を中心とするこれまでの言語学の研究では、言語運用にかかわる要因や言語主体の認知能力にかかわる要因よりも、まず言葉の形式・構造にかかわる要因に目を向けていくというストラテジーがとられている。一般に、この種の分析では、まず言葉の形式的な側面、とくに音韻論から形態論・統語論に進み、その後、意味論、語用論の領域に入っていくというアプローチがとられる。

言語事象の複雑さを考えた場合、このような研究の進め方は理解できる。しかし、これは研究を進めていく上でのストラテジーとして考えなければならない。このように研究の対象領域の区分と分析のステップがある期間にわたって定着すると、実際の言語現象それ自体もモジュール的に区別され、それぞれの部門にかかわる現象が先験的に自律的な現象として存在するように誤解されることになる。しかし、実際の言語現象が、これらの部門によって区分される自律的な現象として捉えられる保証はない。また、言語現象の理解が、形式・構造の側面をみたうえで、言語主体の認知能力や運用能力の側面をみていかなければそのメカニズムが適切に捉えられないという訳ではない。

2. 認知言語学のアプローチ

実際の言語研究を進めていく際にとるべき視点は逆であることが多い。言語現象を具体的にみていくと、言語主体の認知能力にかかわる要因や語用論的な要因を考慮しなければ説明できない現象が、音韻・形態レベル、統

語レベルから意味レベルにわたって存在する。日常言語には、むしろ認知的な視点から、この種の現象を見直していかなければ実質的な意味での説明が不可能な現象が広範に存在する。

認知言語学は、この問題を考慮した包括的なアプローチをとる。言葉は、主体が外部世界を認識し、この世界との相互作用による経験的な基盤を動機づけとして発展してきた記号系の一種である。言葉の背後には、言語主体の外部世界にたいする認識のモード、外部世界のカテゴリー化、概念化のプロセスが、何らかの形で反映されている。認知言語学は、このような人間の認知能力にかかわる要因を言語現象の記述、説明の基盤とするアプローチをとる。このアプローチをとるならば、言葉の背後に存在する言語主体の認知的な制約との関連で、言語現象を包括的に捉え直していく方向がみえてくる。このことは、決して言葉の形式・構造の側面を軽視することを意味するわけではない。むしろ、形式・構造にかかわる制約も、根源的に言語主体の認知能力や運用能力にかかわる制約によって動機づけられているという観点に立つことを意味する。

以上の点から明らかなように、認知言語学のアプローチの特徴は、外部世界を認識する主体の経験的な基盤、主体の認知能力との関連で言語現象をダイナミックに探究していく点にある。認知的アプローチという、「認知的」という用語を特別視して、言葉のメンタルな側面を強調する言語学のアプローチである、というように誤解されるかも知れない。また、外部世界を認識する主体の「経験的な基盤」を考慮したアプローチという、人間の生得的な能力の側面よりも経験的な側面を強調する言語学のアプローチであると理解されるかも知れない。生きた言葉は、その記号系を生みだし運用している言語主体を無視して考えることはできない。言葉の背後には、具体的な生活文脈のなかで生きている認知主体としての人間が存在する以上、言語世界にはメンタルな側面、経験的な側面のいずれも反映されている。また、人間の認知能力には、生得的な側面と経験的な側面の双方が反映されている。認知言語学のアプローチは、言語主体の先

行経験としての認知能力に注目すると同時に、外部世界を認識していく主体の経験的基盤に注目する。言語習得、言葉の歴史的な変化、言葉の創造的な拡張のプロセスをみていくなれば、言語現象の背後には、これらの側面が統合的に反映されていることが明らかになってくる。

これまでの言語学の研究をみた場合、言葉の形式・意味・運用に関する一般的で、包括的な記述・説明を可能とする言語学のアプローチが存在するとは言えない。また、そのような包括的なアプローチが安易に期待できるわけでもない。どのアプローチも、言葉の形式や意味のある側面の定式化を試みてきてはいるものの、事実の予測性、経験な事実の広がりに関する実質的な手ごたえは、その定式化が与える印象からはほど遠い状況にあるといえる。人間の認知能力と運用能力にかかわる要因を言語現象の記述、説明の基盤とする認知言語学のアプローチは、学際的な研究の場の広がりのおかげで、これまでの言語学の分析のスコープを超える、より包括的で実質的な言語研究のパラダイムとして注目されている。

3. 認知言語学と日本語教育

認知言語学の研究は、学際的な進展と広がりをみせてきているが、認知言語学と言語教育との関連にかかわる研究は、実質的にはなされていない現状にある。しかし、認知言語学のパースペクティブからは、次のような研究の方向を日本語教育にたいして示唆することができる。まず、これまでの言語学は、(伝統的な国文法や生成文法にその典型がみられるように)言語能力を中心にした研究が主眼となっている。これにたいし、認知言語学は、言語能力の発現を可能とする一般的な認知能力と運用能力から言語能力を創発的に規定していく。この視点にたつならば、言葉の教育に際し、(母国語の話者であれ、外国語の話者であれ)言葉の背後の言語主体の認知のメカニズムと運用のメカニズムとの関連で、言葉の創発的な側面にかかわる知識を導入ながら、言葉の形式から意味、運用にかかわる知識を提示していくことが可能となる。(ここで問題とする言葉の創発的な側面にかかわる知識は、イメージ形成、視点の転換、意味・構文の比喩的拡張、メトニミー的拡張等を可能とする言語主体の創造的な知識を意味する。)

従来の言語学の研究では、分析の対象となるデータは、主に文字通りの意味ないしは字義通りの意味にかかわる言語事例に限定され、比喩的な表現やメトニミー的な表現、アナロジーがかかわる表現等の言語データは、特殊なデータとして、考察の対象からは除外される傾向にあった。しかし、このような分析対象の区分には、本質的な問題がある。一見したところ、文字通りの意味を内包し自律的に存在するようにみえる言語表現も、根源的には、言語主体の創造的な認知能力(とくに、比喩、メトニミー、アナロジーをはじめとする言語主体の創造的

な認知能力)を背景として発現してきた言語表現であり、この言葉の創造的な発現過程の文脈を無視して、文字通りの言語表現のデータを自律的に規定していくことは不可能である。(例えば、「机の足」、「胸がいたむ」、「不況が日本を襲う」などの語彙、慣用句、構文は一見したところ文字通りの表現にみえるが、根源的には比喩やアナロジーに基づいている。)この種の言葉の発現過程は、子供の言語習得、大人の言語表現の拡張的な生成、外国語話者の対象言語の創造的な理解と習得のプロセスに自然な形で反映されている。認知言語学の観点からみた場合、言語教育の現場においても、この言葉の創発的な視点を何らかの形で体系的に組み込んだ教材と指導法の開発を考えていく必要がある。

認知言語学で重視されるもう一つの重要な視点は、プロトタイプ理論に基づく言語現象へのアプローチにある。この理論に基づく認知言語学の研究では、日常言語の表現は、それぞれが同等の資格で分布するのではなく、典型的な事例から非典型的な事例へとグレイディエンスを成して段階的に分布することが明らかにされている。(例えば、この種のグレイディエンスは、「太郎が計算する」、「?」「コンピュータが計算する」、「*」「電卓が計算する」などの構文の相対的な判断に反映されている。)この種の分布関係は、語彙レベル、句レベル、文レベルのいずれの言語レベルにもみられる。この観点からみるならば、日常言語の言語事例は、プロトタイプとしての中心的な事例から、段階的なグレイディエンスを経て周辺の事例、非典型的な事例へと分布する動的ネットワークとして把握することが可能となる。この事実は、言語習得や外国語の習得の過程とも密接に関係している。一般に、プロトタイプとしての典型的な事例は(周辺の、非典型的な事例にくらべて)実際の伝達の場において使用頻度が高く、理解と記憶の観点からみて情報処理が容易であり、言語主体にとって比較的初期の段階から習得が可能な事例である。言語教育や言語習得の研究に、この典型-周辺のグレイディエンスからなる動的ネットワークを反映する学習システムを応用していくならば、これまでの言葉の学習システムにくらべ、言葉を学んでいく主体の直観を反映する、より自然で効果的な学習成果が期待される言語教育システムの開発が可能となる。

これまでの文法を中心とする言語研究は、(生成文法にその典型がみられるように)トップダウン的で抽象的な規則依存型のアプローチが中心になっている。(このトップダウンのアプローチは、抽象的な規則から事実の分布を一般的に予測していく情報処理的なアプローチに基づいている。このアプローチの文法判断は、規則か例外かの排他的で絶対的な二分法の判断に基づいている。)これにたいし、認知言語学のアプローチは、この種の規則依存型のアプローチの本質的な限界を指摘する。前者のアプローチの問題は、一見したところ標準的なデータ

とみられる言語事実の領域にたいして仮定される規則（あるいは、一見、コアとみなされる言語能力にたいして仮定される規則）の適用範囲が非常に狭く、多くの反例が存在するにもかかわらず、この一般規則から誤った予測（実際の言語使用の事実と反する過剰な予測）をしていく点にある。（例えば、このアプローチの受動規則、与格移動規則によって生成されるかなりの構文は、実際の日本語の構文としては容認されないという事態が生じる。）これにたいし、認知言語学のアプローチでは、言葉を閉じた規則の体系として規定していくのではなく、音韻、形態から構文にいたる言語単位をスキーマとして規定し、この種の言語単位の実際の言語使用の文脈における定着度、慣用化の視点から相対的に規定していく。（語彙の多義性、イディオム的な表現のグレイディエンス的分布、プロトタイプ的な表現と拡張表現の相対的な分布によって特徴づけられている多様な言語事実を考慮するならば、いわゆる「規則」は、この多様な事実のうち標準的に安定していると考えられる言語事実の一部を規定するための理論的な道具立て以上の意義は認められない。）

以上の考察から明らかなように、認知言語学のアプローチでは、トップダウン的に規則が存在し、この規則との関係で可能な事例を派生的に規定していくのではなく、むしろ認知主体の言語使用や言語習得の過程にかかわるボトム・アップ的アプローチを重視する。すなわち、このアプローチでは、言語現象の規定に際し、まず具体的な事例の定着度、慣用度との関連でスキーマを抽出していくプロセスに注目し、この抽出されたスキーマとの関連で他の具体事例の一般化を行い、このスキーマに適合しない事例が出現した場合には、このスキーマが動的な拡張のプロセスとの関連で新しい事例を規定していくという、言語使用を重視したアプローチをとる。

生成文法にみられるような従来の言語学のアプローチの問題は、言語教育の場にも無関係ではない。確かに、言語教育の実際の場においては、事例中心、用法中心の教授法が採用されているとしても、やはりその根底において、文法重視（言語能力重視）あるいは規則重視のアプローチを反映する教授法がとられてきた点是否定できない。この種のアプローチの限界は、記述・説明の対象としての言語能力（ないしは文法能力）を自律的な知識として、言語表現を柔軟に理解し表現していく運用能力や、言葉の創造的な拡張にかかわる認知能力から不当に切り離してきた点にある。認知言語学のアプローチにみられるように、言語主体のもつ認知能力と運用能力を直接的に反映する言語事例の定着度、慣用度との関連でスキーマを抽出し、この抽出されたスキーマとの関連で他の具体事例の相対的な一般化を図っていくアプローチが言語教育の場に採用されていくなれば、これまでの用例重視、規則重視の教授法を越える、より科学的で体系的

な言語教育のアプローチが可能となる。

4. 認知言語学の基本文献

認知言語学の基本的な考え方と研究動向を知るためには、とくに次の文献が参考になる。認知言語学の研究は、言語学プロパーの研究にとどまらず、人間の知のメカニズムの探究にかかわる心理学、文化人類学、生態学、計算機科学、脳科学をはじめとする関連分野にも、重要な知見を与えている。これらの隣接分野と認知言語学との関係に関しては、とくに文献 [5] [6] [8] [10] を参照されたい。

（認知言語学の入門的文献）

- [1] Dirven, René and Marjolijn Verspoor 1998. *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Amsterdam : John Benjamins.
- [2] Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization*. Oxford : Clarendon Press.
(辻 幸夫 (訳) 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店、1996)
- [3] Ungerer, Friedrich and Hans-Jorg Schmid 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London : Longman.
(池上嘉彦 他 (訳) 『認知言語学入門』大修館書店、1998)
- [4] 月刊『言語』(1998)「特集：入門 認知言語学」(11月号)
- [5] 山梨正明 1995 「認知文法論のパースペクティブ」、『日本語学』Vol. 14、No. 9、pp. 73 - 91
- [6] 山梨正明 1998 「認知言語学 新しい言語科学の展望」, 玉村文郎(編)『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社、pp. 251 - 276

（認知言語学の専門的文献）

- [7] Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago : The University of Chicago Press.
(池上嘉彦 他 (訳) 『認知意味論』 紀伊国屋書店、1993)
- [8] Lakoff, George and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago : The University of Chicago Press.
(渡辺昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』 大修館書店、1986)
- [9] Langacker, Ronald W. 1987/1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vols. I/2, Stanford : Stanford University Press.
- [10] Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/NewYork : Walter de Gruyter.
- [11] 山梨正明 1995 『認知文法論』 ひつじ書房